

令和元年度 第1回野洲市総合計画審議会 産業・観光・歴史文化部会 議事録要旨

●日 時

令和2年2月7日（金） 14:00～16:30

●場 所

野洲市役所本館2階 庁議室

●出席委員（委員区分毎・50音順）

1号委員：田中 勝也委員

2号委員：奥邨 武和委員、木村 靖委員

3号委員：松井 佑太委員

●欠席委員

2号委員：松沢 松治委員、望月 幸三委員

●事 務 局

川尻農林水産課長、行俊商工観光課長

吉田政策調整部次長、玉川企画調整課課長補佐、垂企画調整課主査、松井企画調整課主事

●傍 聴 者

2名

1 開会

（1）次長あいさつ

2 報告事項

（1）基本構想素案について

—事務局より資料説明—

◇委員からの主な意見・質問

【委員】「安全・安心への関心の高まり」において、自助と共助にしか触れられていないため、公助も何らかの形で表記してほしい。

また、人権に関する課題について、部落差別については今までの積み上げによって市民に浸透していると思うが、外国人、LGBTと同様にハラスメントについての問題も入れるべきではないか。

野洲市に大都市のような公共交通を期待する声もあったが、野洲市の人口規模、地理では難しいと考えている。JRや国道1号、8号は非常に便利であり、課題は近隣の市町も含めて渋滞解消である。

「30年後、40年後の将来の理想像を眺めながら」という委員意見があるが、30年後、40年後は見通しにくく、総合計画の期間である5年後、10年後ならある程度想定できるのではないか。

【委員】AIを意味するのであればICTではなくIoTではないか。ICTは一世代前の言葉であり、ミスマッチである。AIやIoTを活用して社会的課題を解決するSociety 5.0の考え方も取り入れるべきである。また、ローカル5Gを取得し、自治会活動等に活用するべきではないか。

企業版ふるさと納税に対する税制優遇が9割に改正された。これを活用し、官民融合のプロジェ

クトを立ち上げることで、市内の事業所に勤務する従業員の住む場所がないという課題を解決するべきではないか。働いている人たちは元気な人であり、特に半分以上が単身であると聞いているので、行政サービスの負担も大きくならないと思われる。行政にとっても企業にとってもウィンウィンではないか。

【部会長】野洲に勤めているが野洲とつながっていない方が非常に多く、より帰属してもらえようようなものが必要になる。今度病院ができるが、病院があると見舞いの方も含めて滞在される人へのサービスが商機を生み、魅力を高める要素にもなる。

【委員】駅前には商業地域であり、人が集まる場所であるため、市役所は現状の位置には必要ない。電車で市役所に来る人はいないため、田んぼの真ん中で良い。市域の真ん中に市役所を置くことで、市内における地域間の壁もなくなるのではないか。

観光をどうにかしないといけない。観光でメリットを享受できるのは、泊まって消費してもらうことである。お金を落としてもらうシステムがないと、保全するだけで一生懸命になり、費用ばかりかかってしまう。野洲には観光資源があり、下地はできているのに、拠点になるものが無いからお金を落としてもらうシステムができていない。オクトーバーフェストや花火等、来場者はお金を落としに来てくれているため、このような仕掛けをどんどんしなければならない。

【委員】目標人口が前面に押し出されており、人口だけが目標であると捉えられるかもしれない。日本全体として人口が減っていく中で取り合いをしても意味がないため、それ以外のことで税収が増えれば問題がないのではないか。

住みたい人がいるけれど住宅が足りないから造成すると、一時的に人口は増えるが、30年後にその人たちが住み続けているかといわれると危ないと思う。自分の同級生も殆ど野洲から出て行っている。住みたいよりも住み続けたいと思われる政策の方が重要である。

(2) 専門部会の進め方について

—事務局より資料説明—

3 審議事項

「第1次野洲市総合計画 - 改訂版 -」の施策ごとの総括について

3-1 商工業の振興

◇委員からの主な意見・質問

【委員】創業塾では、新規就農に対する支援も可能なのか。

【事務局】事業を始められる方を支援する意味合いが強いが、農商連携という方向性があるのも良いのではないかと考える。

【部会長】農商連携は重要なテーマである。地産地消はSDGsの中で倫理的な消費と位置付けられており、環境面や食の安全など、様々な面で意義があることである。

【委員】農業も含めて、業を起こしたいという若い人の支援をしてほしい。

【委員】自分自身も昨年会社を立ち上げたが、市からの情報は当てにしておらず、県のホームページ等の情報を参考にしながら書類を書き上げ、法務局に提出した。

新規就農においては、現状では一定以上の農地を用意しないといけないことになっていると思うが、ハードルが高いため、規制緩和する必要があるのではないか。

農商連携については、地場産の食材が手に入るルートがあれば、それを利用した飲食店を立ち上げることにに対する支援があっても良いのではないかな。

【部会長】 市民意向調査でも、駅前に物が無いという意見が多く、駅周辺に地産地消の外出がもっとあっても良い。域外から通勤する人が非常に多いという実態を踏まえると、駅のポテンシャルが非常に高いはずで、それが活かされていないのが非常にもったいない。全国では打つ手がない自治体もたくさんある中で、野洲市は恵まれている。

創業塾に関しては、受講した人に対して、起業に係る手続きを問題ない範囲で簡素化できる等、塾の持つインセンティブがもう少しあっても良いのではないかな。手続きに関してはフェスも同様であり、市内にはフェスを開催するスペースの余地があるため、もう少ししやすい形にして一度来ていただき、野洲のいいところを知っていただくことで、地域経済の活性化や、野洲に引っ越しても良いということに繋がるかもしれない。

【委員】 他市で優良農地を転用して商業施設にした事例があるが、規制の緩和等、土地転用の方法を検討するべきではないかな。

3-2 農林水産業の振興

◇委員からの主な意見・質問

【委員】 農林漁業の永続を「栄続」と表記することはできないかな。

「しゅんぎく娘」は特産品であるが、市内の人も含めて認知されているのか。果樹もこれという特産品が無い。5年、10年では難しいかもしれないが、国、県、大学や研究機関と連携し、特産品開発に対する支援をするべきではないかな。魚については、醒ヶ井の鱒のようなものが家棟川でできたらいいと思う。

圃場整備から年月が経過しており、土地改良施設の老朽化が大きな課題である。野洲市は市域の7割が農林地であり、農林漁業が荒廃すると影響が大きいので、水路や道路が適正に維持管理されないといけない。更新や長寿命化が必要である。

農地、森林、河川は、多面的機能と共にそれ自体が安らぎや和み、豊かな感情や癒しの感情を与えるため、良好な保全や活用が必要である。例えば、三上山にまつわる逸話にちなんだ登山道、菖蒲や希望が丘への農道を活用した遊歩道、水路を利用したビオトープなどができないかな。健康寿命を延ばすという点で福祉や医療面からも農地や森林を利用してもらえばいい。食育や自然観察にも活用できる。

【委員】 地産地消においては、作るだけではなく、地元で採れたものを地元で売らないことにはブランドになり得ないが、道の駅が野洲には一つもない。ただし、売る場所は道の駅である必要はなく、野洲を訪れる人を対象にすれば良い。希望が丘の玄関口は野洲であるため、駅名を「希望が丘野洲駅」にする等打ち出し、希望が丘まで歩いて行けるようにすれば良い。人が歩くと、喫茶店や物販、休憩が必要になる。希望が丘は元気な人が来る場所であるため、整備された道である必要はなく、遊歩道で良い。

秋に開催した市長と行くミステリーツアーは非常に好評であり、その中で市長が「吉川ごぼう」をごぼう抜きされていた写真があった。例えばこれを活かしてキャッチフレーズをつけてPRする等、広報の仕方を工夫しないといけない。

漁業で最も重要なことは森林の保全である。野洲の山に雨が降り、森林で養分を含んで琵琶湖に流れることで魚が集まり、漁業が潤うため、森林保全は非常に重要である。

【部会長】環境保全型農業について、地域特認取組への配分が減ることからカバー作物や有機農業などの全国取り組みへ移行する必要があるという大きな流れがある。その中で、農業についても非常に恵まれている野洲市においてブランド化を進める上で、とがった農産物を具体的に作り上げるということは一番ハードルが高い。既にあるものを何らかの工夫をして付加価値をつける方法として、「ゆりかご水田」がある。今の環境保全型農業は肥料を減らす、堆肥を使うという行為が対象であり、実際に環境によかったかどうかというのは関係がない。「ゆりかご水田」は生き物調査とセットであるため、目に見える形で環境が良くなる。

全県、全国の問題ではあるが、管理が十分に行き届いていない人工林があまりにも多く、結果的に生物多様性に貢献しないし、災害ポテンシャルを高めてしまう。森林をきちんと守ることで、生き物が来て、災害にも強くて、実際に人が足を運んで楽しいようなものになれば良いのではないかな。

【委員】放置竹林やキツネ・タヌキ・イタチ・イノシシといった獣害も問題である。

ブランド化で重要なのは売り方である。インターネット販売にシフトしていてもおもしろい。農園名の入ったシールが貼ってある商品とそうでない商品で売れ行きが全然違うのでパッケージのデザインに力を入れていくのも方法のひとつ。デザイナーとマーケターがいらないことが致命的であり、間違ったところに資金を注入してもいけない。

【部会長】ブランド化を行う上で売り方は確かに大きい。パッケージングを工夫して付加価値を高めて買ってもらうのは、基本的に域外の人であり、地産地消の人は求めているのではないかな。

【委員】地産地消でいえば、食べ方の提案も一緒にしないといけないのではないかな。食べ方がわからないと消費者は買わない。広報等で提案していくのが先決ではないかな。

【部会長】野洲市は恵まれており、見せるものがたくさんあるが、それを見せられていない。市がやるべきところなのかはわからないが、見せ方が違えば印象も異なる。マスメディアではなく小規模なインターネットなど、広報的にうまく発信するためのやり方があるのではないかな。人材は適材適所で良く、野洲市にも子育てをしているから働いていない有能な主婦はたくさんいるのではないかな。

【委員】広報がカラーであれば全然迫力が違う。広告があってもいい。

雇用の創出は眠っている人を起こさなければならず、そういう機会を与えることができていない。

【委員】技術も知識もある定年後のアクティブシニアがたくさんいるのではないかな。

4. その他

3月7日開催予定のワークショップについて、事務局より説明。

5. 閉会